

< 各発表者の要約 >

1 . 研究の経緯・子どもたちの生活スタイル

高旗正人（中国学園大学）

本報告は、昨年、日本子ども社会学会が実施した「全国子ども調査（試行調査）」に続く、本調査に基づくものである。ここでは、前回調査（試行調査）を「冬調査」、今回調査を「秋調査」と位置づけ、分析を進める。

冬調査は2004年1月～2月に、全国16箇所の小学5・6年生、3226名を対象として、また、秋調査は2004年9月～11月2793名を対象として実施した。分析ではこれらを便宜上、三つの地域に分けた。大都市部、農山村部、中間部である。

子どもたちの生活スタイルの分析の結果、大都市部の子どもは、他の地域に比べ勉強時間も長く（表1-2-1）テレビ視聴の時間も短い（表1-3-1）。

現在、調査結果をまとめたものを北大路書房より出版する予定であり、準備を進めているところである。

2 . 子どもの遊びと環境

須田康之（北海道教育大学）

1 . 秋調査と冬調査の比較

（1）遊びの実態

1）放課後、友だちと遊んだと回答した子どもは全体の3割程度である。友だちと遊ばなかったと回答した子どもは、全体の7割いる。放課後の子どもの生活の舞台は、家の中である。（表2-1）

2）秋の方が友だちと遊んだと回答した子どもが若干増え、外遊びも増えている。（表2-2）

3）家の中では、テレビ（6割）を見たり、マンガや雑誌を読んで（3割）過ごすという回答が多い。

秋には、冬よりも、「テレビを見る」、「ごろごろしたり、のんびりする」、「テレビゲームをする」、「友だちと電話でしゃべる」という回答が減少している。（表2-3）

（2）遊ぶ場所

1）秋・冬ともに、第1位は「友だちの家」で、7割以上の子どもが遊ぶことがあると回答している。遊び場の順位は、秋も冬もほぼ同じ。（友だちの家、公園、放課

後の学校、車の来ない道路)(表2 - 4)

- 2) 家遊びと外遊びの嗜好を尋ねたところ、冬は、家と外「どちらも同じくらい」が5割近くいたが、秋は家派と外派に分化した。(表2 - 5)

(3) 遊びの様子

- 1) 一緒に遊ぶ友だち

秋も冬も「だいたい決まった友だちと遊ぶことが多い」と回答した者が7割近くいる。(表2 - 6)

同じクラスの友だちとよく遊ぶと回答した者が、秋には約5割、冬には約6割いた。(表2 - 7)

- 2) 遊びの約束

秋、冬ともに学校で約束をしてからという子どもが5割以上。電話で約束をするという子どもは、1割程度。秋に約束して遊ぶとした子どもがいくらか減少している。(表2 - 8)

- 3) 外遊びの種類

秋も冬も「友だちとしゃべる」「スポーツする」「ボールで遊ぶ」「自転車に乗って走る」を5割以上の子どもがすると回答している。(表2 - 9)

(4) 遊びの中での体験

- 1) 冬の方が、秋よりも、遊びの中で様々な体験をしている。(表2 - 10)

2. 諸変数と遊びの関係

(1) 秋・冬双方における属性間の比較 (表2 - 11)

- 1) 季節とは無関係に属性の違いが遊びの形態を規定している変数

性別、地域特性、学校規模

- 2) 秋に、属性の違いが遊びに影響を与えている変数

勉強時間

- 3) 冬に、属性の違いが遊びに影響を与えている変数

天気

- 4) 季節にかかわらず属性間の違いが少ない変数

ケイタイの所持

(2) 同じ属性での秋と冬の比較 (表2 - 31)

- 1) 秋と冬とでは遊びの様子が違う人の属性

性別の女子、農山村部・中間部の児童、小学校6年生、ケイタイ不所持の児童

- 2) 秋と冬とで遊びの様子が変化しない人の属性

勉強時間が3時間以上の児童

テレビ視聴時間が30分未満の児童

大都市部の児童

雨や雪が降ったりやんだりする日

3. まとめ

「よく学びよく遊ぶ」が理想的な子どもの学びの姿だとすると、今回の調査結果はそれとは大きく乖離していた。今の子どもには、勉強する子は勉強する子、遊ぶ子は遊ぶ子という二極化現象が生じているようである。しかもこれは、子どもが生活する地域と密接に関わっていた。大都市部の子どもの遊びが、季節の影響を受けることが少なかったのは、大都市部の子どもの方が受験圧力が強く、一年を通じてよく勉強しているためだと思われる。農山村部の子どもは、冬には遊ぶ友だちが少なく家の中でごろごろしており外遊びが少ないことが明らかになった。冬に比べ、秋には外遊びが増えていた。中間部の子どもは、他地域に比べ、冬秋通じて外遊びが多く、約束なして離合集散する子どもの姿を読み取ることができた。

3. 友人・携帯・メールの世界

西本裕輝（琉球大学）

子どものネット利用の頻度は、大人が想像している以上に高いと考えられる。パソコン、携帯については大都市部の所持率が高い（表3 - 2 - 1）が、パソコンについては農山村部もかなり高めとなっている（表3 - 1 - 1）。ネット利用が即、犯罪等に結びつくとは言えないが、裾野は広いという認識は必要であろう。

分析ではほとんど地域差が見られなかった。地域差があまりないといことがむしろ特徴かもしれない。最近のネットが関わると言われる少年犯罪にも地域差はあまり見られないように思われる（むしろ佐世保市、光市といった静かな地域の方がそうした犯罪は多いようにも思われる）ので、むしろこうした世界は地域差が生じにくいと考える方がよいだろう。

4. 子どもの放課後の生活 - 学校差(地域差)を中心に -

土橋 稔(世田谷区立給田小学校)

【目的】

全国 16 地点での子どもたちの生活の様子を、各学校ごとに見ていく。各学校を比較検討し、放課後の過ごし方の違いを見ていく。そしてそれが、子どもたちの心にどのような影響をもたらしているのかを考える。

【結果】

(1) 放課後の生活

調査校 16 校の調査地域は、都市部 1 校、中間部 8 校、農村部 7 地点。

起床時刻、就寝時刻共に、農村部に比べて、中間部、都市部の方がやや遅い。就寝時刻は全体的に遅いが、夜 11 時になっても寝ない児童は、「東京 A 小(都市部)で、44.9%」「千葉 F 小(中間部)で、40.8%」「奈良 3 校(農村部)で、48.9%」では、半数近くにのぼる。(表 4-3)

勉強時間は、東京 A 小(都市部)が他校よりかなり長くなっている。家で 2 時間以上勉強する児童が約 3 割いる。さらにこの数値に、塾での勉強が加わると、放課後の時間は勉強だけで終わってしまう。(表 4-4,5)

この東京 A 小は、テレビの視聴時間が他校に比べてかなり少ない。テレビ視聴時間と勉強時間の関連は高く、愛媛 D 小(中間部)も、勉強時間が長く、テレビ視聴時間が少なくなっている。(表 4-5)

テレビの長時間視聴は多くの学校に見られ、中間部の学校が農村部より長くなっている。一日 3 時間をこえる長時間視聴児が半数にのぼる学校は、福岡 H 小(56.9%)(中間部)、2 時間をこえる学校は山形 M 小(農村部)、千葉 F 小(中間部)、長野 K 小(農村部)、仙台 G 小(中間部)と調査対象が 6 年の学校に多くみられる。(表 4-6)

(2) 遊び

学校が終わってから、放課後の校庭で、また帰宅後遊ぶ子どもたちは、どこの地域も少ない。その中で群馬 N 小では、調査日の前日も 71.0%の子どもが校庭で遊び、83.0%の子どもたちが遊び場として校庭をあげるなど、学校が放課後のいつもの遊び場となっている。

(表 4-7,8)

農村部の学校の方が、室内遊びをする割合が高い。「漫画を読む」「ごろごろ、のんびり」で、その割合が高くなっている。(表 4-9)

「ボールで遊ぶ」「おにごっこやかくれんぼ」など、外遊びが多いのが、長野 K 小。同じ農村部でも、奈良(3校)は、外遊びが少ない。(表 4-10)

遊び体験に、学校差、地域差はあまり見られないが、山形 M 小(農村部)、大阪 I 小(中間部)の児童が、「何をして遊ぶのかわからない」「友だちが見つからない」という割合が高くなっている。(表 4-11)

パソコン保有率は、最低でも 66.2%、東京 A 小では、9 割をこす。また、パソコンを使って「インターネットを見ている」「メールをしている」児童が農村部に多く見られる。携帯電話の保有率は、都市部、中間部の方が高い。(表 4-12,13,14)

(3) 生き生き感

仙台 G 小(中間部)、大阪 I 小(中間部)、奈良 3 校(農村部)でくたびれ感がやや高い。特

に数値が高いのは、仙台G小の「いらいらする(42.5%)」、大阪I小「身体がだるい(46.6%)」。仙台G小は、テレビゲームで遊ぶ割合や、パソコンでゲームをしている割合が高い数値を示している。

一方、長野K小(農村部)は、全体に数値が低く、元気な様子が見える。(表4-15)

「もっと長い時間遊びたい」「もっと外で遊びたい」「もっといろいろな友だちと遊びたい」と遊び欲求が高いのが、長野K小(農村部)、埼玉J小(農村部)、山形M小(農村部)である。東京A小は、「もっとテレビが見たい」「もっと眠りたい」「もっと親と話がしたい」と時間がほしいと感じている様子が見られる。(表4-17)

「一日が終わって勉強をがんばった」と、勉強の充足感が高いのは、東京A小、埼玉J小、愛媛D小である。(表4-18)

「今日一日楽しかった」と思う割合が一番高いのが、群馬N小。放課後、学校で遊んでから家に帰る割合が一番高い学校である。(表4-6,19)

「学校が楽しい」と一番多くの児童が感じているのが、東京A小。一方、その割合が低いのが、山形M小、仙台G小。2校とも、遊び体験で、「友だちが見つからず、何をしたらよいか分からない」という数値が高い学校である。(表4-20)

「今、幸せ」と感じている学校は、一番高い長野K小(75.3%)から最も低い奈良3校(45.2%)まで、30%の差がある。長野K小は、くたびれ感が低く、外で遊んでいる児童の割合が高い学校である。(表4-21)

「明日もきっといいことがある」と感じている割合の最も高い埼玉J小は、真っ暗になるまで遊ぶ児童の割合が一番高い学校である。(表4-22)

「楽しい一日だった」や「明日もいいことがある」など、『生き生き感』の高い学校は、東京A小(都市部)、埼玉J小(農村部)、群馬N小(農村部)。一方低い学校は、千葉F小(中間部)、山形M小(農村部)、奈良3校(農村部)である。(表4-23)

『生き生き感』と、自己像の関連は大きい。たくさん遊んだり、勉強をがんばったりする中で、楽しさや自信がまし、自己肯定感も高くなる。(表4-24)

(4) まとめ

今日という日はどの子どもたちにとってもかけがえのない一日であり、その一日を輝かせてあげたい。そしてどの子にも、一日は24時間しかない。その中で放課後の時間は自由度の高い、貴重な時間である。しかし、在校時間の長さや、塾、習い事など、その時間があまりにも少なくなっている。そして、そのわずかな自由な時間の使い方を知らない子どもたちも多い。そのことにより、子どもたちの一日が輝きを失っていく場合もある。

「よく学び、よく遊べ」の言葉が示すとおり、学校での学びは、充実感や自信を育み、放課後の自由な遊びは、今日の楽しさや明日への希望を生む。16地点の学校を比較して、子どもたちの放課後の持つ意味の大きさを、改めて痛感した。

5 . 子どもの放課後の心理的環境 - 幸福感と成長感覚を中心に

深谷和子（東京成徳大学）

目的：子どもの放課後の心理的環境を見ていく。全国16地点での子どもたちの1日の暮らしは、どのような充実感をもって展開しているか。

結果：

1) 子どもの幸福感の現状

子どもの成長にとって大事なことは、内的な世界が幸福感で満たされていることであろう。

「学校は楽しいか」をみると、「とても楽しい、わりと楽しい」をあわせると、学校が楽しいとする者は60%。(表5-1)。

同様に「今、あなたは幸せですか」と尋ねると、学校の楽しさよりはやや数値が下がって、55%が「とても、わりと幸せ」と答えている(表5-2)。学校の楽しさと幸せ感の相関係数が.505

また「今と幼稚園の頃では、どちらが幸せと思うか」では、67.9%が、「幼稚園の頃より、現在の方が幸せ」と答えた。女子の方がやや後ろ向きで、小さい頃のほうが今よりもっと幸せだったと答えた者は、男子よりやや多い(表5-3)。

幸福感やその周辺の感情では、子どもの毎日は「とても楽しい」とか「とても幸せ」のような最上級の感情ではないものの、大方が「わりといい状態、ほどほどいい状態」にある。

幸せ感の薄い層の存在

しかし注意してみると、「学校があまり楽しくない、全然楽しくない」とする者があわせて16%おり、とくに男子が19%と多くなっている(表5-1)。「現在、あまり幸せでない、全然幸せでない」とする者はあわせて19%いるが、これも男子が女子より有意に多くなっている(表5-2)。また「過去の方が幸せだった」とする者が全体で32%おり、このやや不幸せな感情をもつ層の分析と、それらの子どもへの対応(多面的なサポート)が必要と思われる(表5-3)。

2) 自己像

幸せ感に基底にあるのは、子どもが捉えている「自分」の特徴、すなわち自分を評価できる存在と思えるかであろう。

5つの自己評価項目で、子どもが外から客観的に把握しやすい側面として、「友だちの多い子、スポーツの得意な子、勉強のできる子」をみる(表5-4)と、いちばん自信を持っているのは「友だちの多い子」で、「とてもそう、わりとそう」をあわせると、6割。しかし子どもの人間関係が浅くなっている現状の中で<絆の浅い友人が沢山いる自分>が、自分のもっとも肯定できる側面であるとは、やや寂しい感じがする。

「スポーツの得意な子ども」は43%、「勉強のできる子」は22%と肯定率は大きく下がっていく。この2つは子どもにとっての2つの大きな価値であろうが、肯定率の低さは気がかりである。

主観的判断がより可能な領域「頑張る子ども」「心が優しい子ども」をみると、44%と35%。数字としては低いとは言えないが、こうした主観的な項目はもっと数字が上がってもいい。

この5つの自己評価がすべて有意に女子に低い。その理由を探ることと、女子へのサポートが必要であろう。

3) 体調

幸福感の基本とも考えられる、もう一つの側面、「主観的な体調」とも言うべき側面を見ていく(表5-5)。

「疲れやすい、夜なかなか眠れない、朝おなかが空いていない、体がだるい、いらいらする」という、子どもらしくないとも表現できそうな、体の不調感を見た。「いつもそう・わりとそう」の小計の数字からは、慢性的とも言える体の不調感をもっている子が少ない。

多くの子どもが感じているのは、「疲れやすい」で、「いつもわりと疲れやすい」自分と捉えている子は49%いる。自分への自信のなさの表現だろうか。「からだのだるい」の32.2%と合わせると、かなりの子どもの間に一種の倦怠感が広がっているかのような印象を受ける。さらに、「夜なかなかねられない」35.5%、「朝おなかが空いていない」32.5%と、まるで大人のような身体的訴えが見られる。子どもの活力の低下とでも言うべき状態があるのだろうか。

「いらいらする」では、いつもいらいらしている子が14%、わりとそうをあわせると28%と、3割近くがストレスを感じているかに見受けられる。子どもの成長過程に、ある種の危機的過程が進行しているのだろうか。

4) 一日の終わりに思うこと

夜寝るときに何を感じて眠りにつくかは、一日の過ごしかたの総括であろう。そこには、子どもの幸福感が圧縮されているとも言えそうである(表5-6)。

「疲れた」と思って眠りにつく子が、「いつもそう思う・わりとそう思う」を併せると64%。これには性差がない。目いっぱい遊んで動いた結果としての心地よい身体的疲労感であれば、子どもの健やかな生活を意味しているであろうが、子どもの欲求をみた別の設問(調査票6ページの<10>)表5-1-Aに見るように、「もっと長く眠りたい」子が70%もあり、精神的疲労が回復していないのではないか。

表5-2、「夜なかなか眠れない」36%、「朝おなかがすいていない」33%の数字とあわせると、疲れているのに眠れず、疲労感がとれず、1日の初めに食欲がないなど、まるで大人のような姿が浮かび上がる。

これは「明日、学校が休みならいいのに」の63%につながってくるのように思われる。他の数字ともあわせて、やはり子どもの中には、慢性的な「体と心の疲れ」の広がりが推定される。

さらに気がかりなのは、「明日もきっといいことがある」とポジティブな感情で眠りにつく子は、わずか29%。「あまりそう思わない・全然そう思わない」と合わせると、明日の希望を否定する者が5割を超える。これには性差があって、「全然そう思わない」とする子は、女子より男子にやや多い。

こうした「疲労感や明日への希望の低さ」と関連がありそうなのは「楽しい1日だった」である。「いつもそう思う」子は19%、「わりとそう思う」をあわせると、54%と半数以上が「楽しい1日だった」と思っている。しかし、「ときどきしかそう思わない」28%、「あまり・全然そう思わない」者があわせて27%いる。決して少ない数字ではない。

また「沢山遊んだ」とする充足感、満足感は、「いつも・わりとそう思う」をあわせると46%。しかし「あまり・全然そう思わない」者も合わせて30%いる。それと関連すると思われるのは、「もっと長時間遊びたい」子についてで、「よく思う・ときどき思う」を合わせると85%と、ほとんどの子どもが遊びの不足を訴えている。(表5-6-B)

「勉強を頑張った」とする充足感を見てみると、僅かに25%。「あまりそう思わない」者が5割近くもいる(表5-6-C)。しかも男子に、そうした勉強の頑張り感が少ない。「もっと勉強ができる子になりたい」とは68%もの子が感じているが(表5-6-D)勉強を頑張った感じがもてない毎日と言えそうである

<まとめ>

以上を総括すれば、子どもにとって学校はわりと楽しく、幸せ感もほどほどに高い状態ではあるものの、全体的に疲労感が強く、もと長く眠りたいと思う子が多い。3分の1位の子には身体的な不調感があり、自己像も友だちが多い子以外はぱっとしない。明日もいいことがあると比較的いつも思っているのは3割にすぎない。沢山遊んだという充足感がなく、もっと遊びたいと思っている。勉強ができる子になりたいとは7割近い子が思っているものの、1日の終わりに勉強を頑張ったという充足感をもつ者は25%しかいない。

漠然とした幸福感はあるものの、気持ちの張りや充足感がないという状態とまとめられるであろう。また男子女子それぞれに違った部分で問題を感じる。

5) 幸福感の低い子

強い幸福感をもっている子とそうでない子を分析した。(表5-7)

幸福感の度合いを3群にわけて、他の項目との関連を見ると、3つの群の中でも、とりわけ「不幸せ群」と名づけられたグループの男子22.1%女子15.2%には、かなり心理的な問題があるように見受けられる。この群は自己評価が低く、体調が悪く、疲れており、学校が休みであればいい、楽しい1日だったとは思えないなどの数字が顕著である。この層には何らかのサポートの必要性を感じる。

6) 子どもの成長感覚

子どもの幸せ感の構成要素の一部でもあると思われる、子どもが自分の成長をどのように捉えているかを質的なデータから探ってみた。「幼稚園の時にはできなかったことで、いまはできるようになったことがありますか」「幼稚園の時にはできたけれど、いまは出来なくなったことがありますか」の自由記述をKJ法で整理した(図5-4)

子どもは自分が成長していると感じる「プラスの成長感覚」だけでなく、自分が衰えていると感じる「マイナスの成長感覚」をも同時に持っている。一つは自分のおかれている状況、周囲から受けている待遇の変化、いわば住む世界の変化であり、もう一つは自分の中に起きている変化である。

住む世界の変化は、子どもに与えられていた特権の喪失、すなわち「自由」の幅が減ったこと、親からの保護が与えられなくなった自分、という感覚である。

また自分の内部にはは、1)体の衰えとして、運動能力や体力、器用さを失った自分があり、2)心理的・行動的变化としては、A．他人への恐れ、他人への意識、社会的引っ込み、他人を意識しての自己抑制などがあり、また、B．幼い生き物としてかつてもっていた「心や行動の勢い」の喪失感がある。

<まとめ>

少しずつ大人にさせられていく自分、自分の中により幼い頃にもっていた人生の輝かしさ、自分のみずみずしさ、生きのよさ、大胆さを失て来た自分があり、また他方では「新しい自分」へ向かう過程、「もう親のいい子ではいられなくなった自分」(親の言うことができなくなった、言葉遣いが悪くなった、わがままになった、素直にあやまれなくなった、偏食になった)などの自己主張が起きようになる。これは親を離れて自立していく過程の始まりを示すもので、人への恐れや対人的引っ込みが意味する「社会的存在」への歩みと共に、子どもが成長を遂げていく過程にある姿を示すものであろう。成長はプラスとマイナスの両方の糸で縋った縄のようなもので、種々の相反する要素をも含みながら、全体にはより太い綱となって、子どもの成長を完成させるのかもしれない。

(以上)